法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

講演 ますます丁寧化する日本語 : デス・マスを中心に

尾谷, 昌則

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
87
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
18
(発行年 / Year)
2013-03

Hosei University Repository

〈講演〉

ますます丁寧化する日本語

――デス・マスを中心に――

尾谷　昌則

ただいまご紹介いただきました尾谷と申します。よろしくお願い致します。私の専門は日本語学です。ただ、日本語学と言いましてもさまざまな分野がございまして、私がやっているのは主に理論言語学、特に理論言語学のなかでも認知言語学理論です。ですが、今日はあまりコテコテの理論のお話はしないで、なるべく実証的なお話をしようと思っております。といいますのも、私も理論屋としていろいろな現象を見てきたんですけれども、現象を見れば見るほど、なかなか理論で一筋縄に説明できないものが多い、非常に簡単にいいますと例外が多い、ということに気付きました。そこで、理論はしばらく置いておき、具にデータを見るような研究をしたいと思いまして、ここ二、三年はそういった方向に少しシフトしております。

本日講演のテーマとして選びました『ますます丁寧化する日本語』ですけれども、これは昨今、敬語の乱れなどが非常に問題があると取り上げられておりますので、その方向に沿ったものです。何かタイトルに駄洒落みたいなものを入れようと思って、今日はデス・マスを扱うから、「ますます丁寧化する」と入れてみたんですが、よくよく考えると、私が今日主に扱うのは、マスよりもデスなんですね。で、しくじったなぁと今、タイトルを見ながら思った次第です。（苦笑）

では、さっそく話に入りたいと思います。

一言で「日本語の丁寧化」といっても様々な現象があります。中でも、敬語の乱れという話がよく出てきます。まず紹介しますのは、「させて頂く」という表現の乱用です。たとえば、

（1）a．本日は休業させて頂きます。

b．板野友美さんとお付き合いをさせて頂いております。

このセリフ、私一度言ってみたかったんです。ただ、それだけです。（苦笑）

c．弊社は新しいライフスタイルのご提案をさせて頂いております。

Hosei University Repository

「させて頂く」という表現は、相手から許可をもらって何か行為を行うというのが本来の意味なんですけれども、相手の許可を得ないで、勝手にやっている場合でも使われる。あと、(1) b.「板野友美さんとお付き合いをさせて頂いております。」というのは、もし私がこれを言えれば、秋元康氏の許可を得なければいけないんですよね。その点では、許可を得るというのは外してないんですけれども、それは、皆さんにとっては――この会場にいらしている皆さんにとっては、別に私が誰に許可をもらっていようと特に関係のないことですから、時と場合によっては「頂く」を使うと不適切になります。さらに、この「させて頂きます」に関連してよく指摘されるのが、「させて頂きます」が一つのフレーズになってしまうと、本来は「さ」をいれなくてもいいところでついつい「さ」をいれてしまうという現象です。

(2) a. 私の言葉で言わさせて頂きますと、……

b. ……と思うんですが、その点、今の心境をもし伺わさせていただければと思うんですが。

こちらはすべて、国会の議事録から取ってきた用例ですけれども、今はいい時代になりました。国会議事録検索システムというのがホームページにありまして、誰でもアクセスして国会の発言を検索することができます。それで、「させて頂く」をキーワードに入れて検索すると、出るわ出るわ。非常にたくさん出てきます。

次に三点目です。今度は「さ」ではなく、余計な所にいわゆる目的語の「を」を入れる現象「ヲ入れ言葉」です。例えば

(3) a. お待たせをいたしました。

これは「お待たせいたしました」でいいところなんですが、「を」をいれてしまう例。また、

b. 表敬訪問というような形でお会いを致しました。

これは、長妻議員が二〇一〇年に記者会見をやってそれがニュースで流れたんですが、それを聞いて「これだ！」と思ってメモしたものです。もちろん、国会議事録の検索システムで検索すれば恐らく何件か引っ掛かってきますけれども、私たちが日常何気なく聞いて、右から左の耳へ流れているものの中に、ちょっと奇異な表現がたくさん入ってきています。

さらに、四点目ですけれども、「お訴え」という表現、もしかしたら皆さん聞いたことのある表現かもしれませんが、例えば

(4) a. ……の自治体の悩みがある、それだけはお訴えさせていただきたいと思います。

という、国会議員の発言。さらに、

b. 私のところには……町会議員も来られます。そして、実情を本当にきめ細かく、こういう状況だからということをお訴えをされます。

地方から陳情する人たちが来るということを仰っているんだと思いますけれども、自分が何かを訴える場合に「訴えをさせて頂く」と言ったり、もしくは、相手が来て、自分の所になにか訴えに来たという場合にも、「お訴えをされます」という言い方をしていますが、「訴え」に「お」をつけて「お訴えをする」という言い方は変ですよね。「訴え」は名詞で使うことも

Hosei University Repository

できますが、「お訴え」という用法はありません。

このように目的語の「を」だけではなく、いわゆる美化語の「お」を不用意につけてしまうという過剰な敬語もよくみられます。これに関して、ひとつ、面白い動画がありまして、もう終わってしまった番組ですが『タモリのジャポニカロゴス』という、私の非常に大好きな深夜番組がありました。もう終わって二年か三年経ちますけれども、その深夜番組で奇しくも、日文科の卒業ではなくて中途退学だったと思いますが、糸井重里さんがよくゲストで出てくる「いいまつがい」というコーナーがあります。いわゆる普通我々が日常で喋っている言葉で、うっかりと言い間違えてしまったのを紹介するコーナーがあるんですけれども、そこにこの「お」の例が出てきているものがありましたので、ちょっと、ここで上映いたします。

〈ここで動画を再生〉

このような間違いです。冗談のようなものですけれども、これはちゃんと投稿があったそうです。今「お夜分」という言い方が出てきましたが、他にも、たとえば客に「お」をつけて「お客様」という言い方があります。「お客様」という言い方自体は何も誤った敬語ではありませんけれども、昨今はそれが絶対敬語のように使われる例が見受けられます。これは私が学生と話していて気付いたんですけれども、学生が私に対して

（5）学生：この前、お客様と話してる時に……

と言って、敬語の質問を私にしてきた時の話し方ですが、私は別にアルバイト先の上司でもなんでもないんですが、私に対して、「お客様と話していた時に」と言うのは明かに不適切な言い方ですよね。もちろん、「客と話してる時に」と、「客」と呼び捨てにするのはちょっと抵抗があるという気持ちは私にもわかりますので、しょうがないとは思いますけれども、最近ではお客様がいない場面でも、お客様、お客様と乱用されています。

さらに六点目は、「ございます」でございます。これも少し乱用されているところがあるようです。私が実際耳にした用例なんですが、埼玉県ですかね、新三郷にＩＫＥＡというショッピングセンターがあるんですが、そこに行ってた時にランチを食べようと思って入って行くと、右のコースと左のコースと二つあるんですね、セルフサービスのコースが。で、どっちが空いてるかと思って見ていたら、店員さんが「両方に同じ料理が並んでいますから、どっち行ってもいいですよ」という趣旨のことを言ったときに、「両方に同じお料理が並んでございます」と言ったんです。「並んでございます」……なにか変だなと思って冷静に考えてみると、「ございます」というのは、「あります」の丁寧な言い方ですよね。「ある」に直して「お料理が並んであります」というのは、やっぱり変ですよね。「並んでいます」だったらいいですね。何でもとにかく「ございます」と言っておけば丁寧なのだということで、過剰に出てきた間違いだと思われます。

次に、「でしたです」とか、「ますです」。丁寧語の代表格は、もちろん「です・ます」の二つですけれども、その二つを同時に使ってしまうという現象も良くみられます。たとえば、私が大好きなＴＢＳラジオ『安住紳一郎の日曜天国』の番組の中で安住アナが

Hosei University Repository

（7）皆さんはこういうものに積極的に参加をする方でしたですか。

という言い方をなさったんです。仮にも一流のアナウンサーが「でしたですか」はないだろうと思ったんですけれども、そういうアナウンサーだからこそ、逆に私は、これはいい例を頂いたなと思いました。「マス」と「デス」を使う、

（8）けげんな顔をしていましたですか、そんなに。

のような例も良く見られます。ですが、（7）の「でしたですか」というのは「です」を二回用いていますので、非常におもしろい間違いですね。もう一つ、

（9）菅副総理のようないい答弁ができるかどうか、頭の違いがありますですから御寛容いただければと思います。

鳩山さんの総理の時の発言です。野田総理も「いましたですか」という風に使っていますが、実は国会議事録検索システムで「ますです」というのを検索してみると、かなりの数が出てきます。これはおもしろい間違いだと思って、遡ってどんどん検索していくと、たくさんあるんですね。昔から。私の予想としては、昔はこんな間違いがなかったけれども、最近、やはり日本語が過剰に丁寧化してきたから増えたんだろう、と勝手に思い込んで検索してみました。すると、昔の方がちょっと多く出てきてしまいました。昔からよく見られる表現のようです。ただ、安住さんの間違いは非常におもしろいですね。これ、音声が録音されていますので、皆さんにお聴き頂こうと思います。

〈ここで安住アナの番組を再生〉

今ここに話がでてきた「デス」と「マス」ですが、基本的には「デス」と「マス」というのはちゃんとした使い分けがあります。「マス」は動詞の場合に用い、「デス」は名詞・形容詞・形容動詞の場合に用いるといった棲み分けが現代ではなされています。

まず動詞から見ていこうと思いますが、動詞が述語になっている文、もちろん「マス」がありますから丁寧な文です。ル形とタ形と書いておきましたが、ル形とタ形というのは、日本語教育業界の呼び方でして、ル形というのはいわゆる現在形、伝統的な国文法でいうと終止形に相当します。タ形というのはいわゆる過去形のことですね。「現在形」だとか「終止形」だとか「過去形」だとかいっても、日本語が分からない外国人は「過去」という言葉も知りません。ですから「過去形」という言葉も使えませんので、ル形タ形という言い方でとりあえず初期の段階は教えます。このル形は、「食べます」「飲みます」という形になりますが、「食べるです」「飲むです」のように終止形にそのまま「デス」をつけるようなことはできません。一方タ形の場合ですけれども、「食べました」「飲みました」と、「ました」が過去形ですが、「食べたです」とか「飲んだです」という言い方はできません。もちろん「飲むでした」「食べるでした」という言い方もできません。

こんどは否定形の場合にいきたいと思いますが、

（13）食べません、飲みません。

食べないです、飲まないです。

否定形になると「ません」と「ないです」と両方の形が使えるようになってしまいます。基本的には動詞は、丁寧形が「マ

Hosei University Repository

ス」ですから、「デス」を使うのは本来あってはならないはずの表現なんですが、最近こういう言い方が非常に増えてきています。

タ形の場合はどうかというと

(14) 食べませんでした。

今度は「ません」――「マス」形に、「でした」(「デス」の過去形が)ついていますね。「マス」と「デス」が同時に使われています。これは、文法のシステムがまだ成熟していないといいますか、いわゆる文法にも例外があるという非常に良い例ですよね。昔はどう言っていたかというと、昔は「食べませなんだ」と言っていました。「ませ」に否定の「ん」をつけて過去「だ」を言っていますのでよかったんですけれども、現代ではそこが「でした」に変わってしまいました。

「食べなかったです」というように、マス形ではなくて「デス」を使った丁寧な過去の言い方も存在します。ですから、ここもマス形とデス形と両方存在するということになってしまいます。

ここにまたひとつ動画があるんですけれども、これは私が「デス」と「マス」を研究しようかと思ったきっかけになったものです。何気なくレンタルビデオに借りてきたアニメを観ていた時にちょっと気になる表現があったんです。

〈ここで動画を再生〉

このシーンの最初に出てきた少年、シンジ君というんですが、彼は端的に言うとお払い箱になってしまったわけです。自分から出て行ったわけですが、一緒に仕事をやっていた青い髪の少女、レイという女の子がいまして、そのレイが「シンジ君が出て行くの引き止めなかったですね」という話を他の職員がしているというシーンです。ここで「引き止めなかったですね」という言い方が使われています。「引きとめませんでしたね」という言い方ももちろんできますよね。この時に、何で「引き止めませんでしたね」じゃなくて「引き止めなかったですね」って言ったんだろうと疑問に思いまして、そこから「マス」と「デス」の違いについて興味をもって調べるようになりました。

次に動詞ではなくて、名詞・形容詞・形容動詞の文にいきたいと思いますが、これは非常に簡単です。

(15) a. 私は教師です。

「教師」という名詞に「デス」がダイレクトについています。

b. 彼女は綺麗です。

「綺麗」という形容詞に「デス」がついています。

c. とても美しいです。

形容詞「美しい」に「デス」がついています。

形容詞に「デス」がつくのは、割と最近の用法でして、以前はどう言っていたかというと、「とても美味しいです」ではなくて、「とても美味しゅうございます」と、「美味しい」に「ございます」をつけて言っていたんですけれども、後でちょっとお話しますが、「ございます」という言い方には過度の敬意があり、非常に重々しいため、もう少しカジュアルに使える表現をということで、「ございます」が嫌われて、代わりに「デス」が使われるようになったと言われています。

今度はタ形ですけれども、名詞の場合、

Hosei University Repository

(16) a．私は教師でした。(＊教師だったです。)

「です」が「でした」になっただけ。隣に(かっこ)をして「教師だったです」と書いてありますが、これは皆さんどうですか。許容できますか。「私はかつて教師だったです」。恐らく、許容できないという方が多いと思いますけれども、許容できない場合は、＊を付けるというのが、言語学では通例になっていますので、ここでも＊をつけてあります。

b．彼女は綺麗でした。(＊綺麗だったです。)

これも、「綺麗だったです」という言い方が理論的には可能なんですが、これはどうでしょうか。「教師だったです」に比べると、まだ言えそうな気が私はするんですが、一般的に考えるとまだまだ許容できない表現でしょうね。

次、形容詞。

c．＊とても美味しいでした。(美味しかったです。)

形容詞の場合は、「でした」という過去形ではなくて、「美味しかったです」と形容詞を活用して、それに「デス」を添えるという形が用いられます。ですから名詞・形容動詞と、形容詞ではここでも振る舞いが違ってきます。文法のルールが首尾一貫していないということをここでも表わしています。

時間がないので、ちょっとル形の否定は飛ばしましょう。タ形の否定も飛ばしましょう。〈スライドを2枚飛ばす〉

このように、「デス」と「マス」は必ずしも、一貫した文法のルールがあるというわけではありません。時には、「食べませんでした」のように、「マス」と「デス」が両方使われるような場合もありますから、完全なルールにはまだなっていません。

ここで取り上げたいのが、「デス」の問題です。「マス」と「デス」をみた場合には、「マス」の方が起源が古くて、「デス」のほうが新しい。「デス」の発展に関しては、いくつかの説があります。たとえば、『日本語文法大辞典』に載っている説を四つここに引用してきましたが、

①断定の助動詞「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」、動詞「候」のついた「にて候」が、「で候」→「でそう」→「です」へ変化したという説

②「〜でございます」から「でござんす」「でがんす」「であんす」「でえす」などを経てなったという説

③「であります」から転じたという説

④「で」に文語のサ変の「す」が付いたという説

④はちょっとどうかな、という気がしますが、①②③はどれをとってもいいかな、どれも、ほとんど似たようなことを言っているようにも思えます。

この「デス」の初出は割とはっきりしています。最初にみられるのが室町時代の狂言です。

(19) a．是は地獄の主閻魔大王です(狂・朝比奈)

b．東国にかくれもなひ大名です(狂・入間川)

ただし、この時代の「デス」は活用が全くない例外的な用法だそうです(湯沢一九五四)。ですから室町時代のこの「デス」は現代の「デス」のルーツにはなっていないのではないか、という風に扱われています。じゃあ、現代の「デス」のルーツになったのは何かというと、江戸時代前期の「でえす」ではない

Hosei University Repository

かといわれています（辻村一九五九）。たとえば、

（20）寺岡平右衛門とは、ヱ、なんでえすか（伎・仮名手本忠臣蔵）

こういった表現が上方を中心に見られたそうです。これが江戸時代後期になるとだいぶ定着して、たとえば

（21）a．うつて替つたなされ方是にはやうすのあることでせう（「春色恋廼染分解」初編下　万延元年刊）

b．入らさるお世話なやうですが……（同書二編上）

のようにでてきます。ここで、「でえす」ではなくて、「です」の形で出てきます。さらに

c．此の一間においた隣の宅が花雪さんの遠い親類ださうです（同書二編下）

単に名詞の後ろに「デス」がつくだけではなくて、たとえばcの伝聞の「そう」のうしろに「デス」がつくというように、必ずしも名詞の後ろにつくのではなくて、少し用法が拡大していることがわかります。さらにそこから明治に入りまして、「デス」は少しずつ定着していって、一般にも広く使われるようになってきます。江戸後期の場合は、地方から上って来た人や、もしくは遊郭の遊女のような、限られた人にしかその表現が使われていなかったようですが、明治期に入ってくると、ひろく一般人に男女問わず使われるようになってきます。それが決定的になったのが、明治二六年、教科書の中にこの「デス」体が採用されたことであると前田（一九六〇）や辻村（一九六八）などが指摘しています。また、ちょうど期を同じくして、山田美妙などによる言文一致運動も起こりましたので、この時に「デス」体が教科書と同じように広く流布していって、そこから民衆の支持を得たということになっています。ちょうどこのころ、教科書にも使われるようになり、言文一致運動にも使われるようになり、広く流布したことによって、用法が定着します。用法が安定してくると、どんどん拡大していくわけですが、大きな転機が訪れます。それが、形容詞の後ろにも「デス」が付く例が出てきた、という事実です。

（22）a．不可ないですか。（泉鏡花「海城発電」）

b．宜しいですか、お宮さん。（尾崎紅葉「金色夜叉」）

c．そら熱いですよ。（国木田独歩「二少女」）

のように、それぞれの文語のなかにもこういった用法がでてきます。

一九〇〇年以降もこの、形容詞の後ろにつく「デス」はますます発展を遂げて、

（23）a．子をあけて這入るのに少々薄気味がわるかったです…（夏目漱石「吾輩は猫である」）

b．何が面白かったですか。（夏目漱石「虞美人草」）

c．昨日は帰りは遅かったですか。（田山花袋「布団」）

のような夕形の例もどんどん出てきます。

昭和に入りまして、「デス」はますます定着するわけですが、まだ形容詞のうしろに「デス」をつけるという言い方に違和感を覚えるという人もたくさん残っていました。このあたりのことは今日、会場にいらっしゃっている皆さんの中にも、この当時のことを少し覚えていらっしゃるという方もいらっしゃるかもしれませんけれども、形容詞の後ろに「デス」をつける用法

Hosei University Repository

は――たとえば（24）にあげた湯沢（一九四四）の中でも「未だ耳に熟さない」という言い方がなされています。ですが、昭和二七年の文科省が出した「敬語の指針」のなかに、「平明簡素な形として認めても良い」という記述がなされましたので、ここからはＮＨＫの放送などでも少しずつ使われるようになってきて、さらに市民権を得ていきます。

この形容詞＋「デス」が生まれた背景として、当然「デス」が定着したから名詞の後だけじゃなくて形容詞の後ろにも、と広がっていったのだと、ただ広がっていったのだというだけでも説明はつくと思うんですけれども、辻村（一九六五）は、先ほどちょっとお話しましたが、「でございます」が持つ過度の敬意、これを回避するために少しカジュアルな丁寧表現として「デス」が便利に使われたのではないかという指摘をしています。「寒い」の丁寧表現

（25）寒うございます。

現代人でこれを言うと、ちょっとタイムスリップしてきた人かなと思われてもしょうがないですよね。寒うございます……どうですかね、帝国ホテルのボーイさんだったら使うんですかね、今でも。岸朝子さんは使っていましたよね。「大変美味しゅうございました」と。あの、料理評論家の。ですが、普通の人はもう使わなくなっていると思います。

このように「ございます」は過度の敬意が感じられて使いづらい。もう少しカジュアルな、ほど良い丁寧さを求めるという動きは、もちろん「デス」だけではなくて様々な表現の中に出てきています。

たとえば、理由を表す接続詞。「だから」を使う場合と、「ですので」のように「ので」と使う場合と二つ代表的な接続詞がありますけれども、「だから」というと、ちょっとタメ口口調ですよね。かといって「ですから」「ですので」と「です」を使ってしまうと、たとえばサークルの先輩なんかと話している時はどうでしょう。学生が先生と話す時には「ですから」というは非常に自然ですが、一、二歳年上のサークルの先輩に「ですから」「ですので」という言い方をすると、おそらく、相当よそよそしい人間関係になってしまいますよね。ですから、「ですから」「ですので」という過度に丁寧な表現ではなく、かといって「だから」のようなタメ口口調でもない、「なので」という表現が最近は非常にたくさん使われるようになってきました（尾谷・二枝二〇一一）。私も、ゼミの発表で学生が言ってるくらいの場合ですと特に咎めは致しませんけれども、最近はこれがレポートに出てくるんですね。「なので」というのが文章化されると、やはり私はものすごく違和感を覚えてしまいます。ですが、いつかは定着していくでしょうね。しょうがないと思います。

では、続いて四節に入りましょう。

このように発展・定着してきた「デス」ですが、これが、動詞と一緒に使われる場合も見られます。ただし（27）ａ．のように、現代でも「書く」に直接「デス」をつけて「書くです」のような言い方は一般的には認められていません。しかし、

ｂ．書くでしょう。

のような場合であれば何も問題はありませんし、先ほどもちょ

Hosei University Repository

っと言いましたが、「書かない」に「デス」をつけて

c．書かないです。

も最近非常に多く見られるようになってきました。ですから、「書くです」という表現も、あと一〇年、二〇年すると、定着してくるかもしれません（笑）　私はそんな簡単には定着しないだろうなとは思っていますが、ただ、近代の小説のなかには、動詞にダイレクトに「デス」がついた表現が見られないわけではありません。

（28）a．僕は寧ろ富山を不憫に思ふです。（尾崎紅葉「金色夜叉」）

b．……御自分の脚で歩くです。（泉鏡花「義血侠血」）

近代小説にはこういった表現が出てきます。ただし、よくよく読んでみると、この発言をしている人が、地方から出てきた人であるとか、もしくはちょっと職業的に身分が低いといった場合に意図的に使われているようで、幅広く使われているわけではありません。あくまでも非常に例外的な用法としてしか出てきませんので、この用法は未だに定着していませんが、（29）のように、「でしょう」の形も同時期に見られます。たとえば、

（29）a．アノ様子では今明に起きるでしょう。（黒岩涙香「幽霊塔」）

b．縁が有れば誰か又外の人が取り出すでしょう。（同書）

c．能くも此の職業の秘密が世間へ洩れずに居る事を怪しむでしょうが……（同書）

のような場合。動詞＋「です」は定着しませんでしたが、動詞＋「でしょう」は現在では完全に定着してしまっている用法です。なぜ、「でしょう」の方だけが定着したのでしょう。これに関しては、辻村（一九六五）や井上（一九九五）などが、推量形と意志形の棲み分けを行ったのだという説を唱えています。私も、もちろんこれを支持しています。たとえば、

（30）a．起きよう。

と言えば、「起きるぞ」という意思を表す他に、「起きるだろう」という推量を表す用法も昔はありました。ですが、現在では、推量の方は「起きるだろう」、もしくは「だ」の丁寧形「です」を用いた「起きるでしょう」が一般的に使われています。こうすることで、意志形と推量形が区別されるという状態に現在はなっています。こういった棲み分けを行うという理由があったからこそ、定着したのだと考えれば、「でしょう」の方だけが定着したという理由は自然に説明できるものと思われます。

今、この推量と意志の棲み分けが行われたと申しましたけれども、この推量表現に関しては、丁寧の「マス」と一緒に使えるようになったということからも、「でしょう」が完全に推量表現になったのだということが裏付けられます。たとえば、

（31）a．おかぜでございますから、しずかにしていらっしゃると、間もなくおかぜが抜けますでしょう。（太宰治「斜陽」）

b．……こういう時代にこそ堂々とやってゆくのが病院の任務というものだよ、とおっしゃいますでしょうな。（北杜夫「楡家の人々」）

のような表現。「マス」のうしろに「デス」が使われています。

Hosei University Repository

「マス」が丁寧、「デス」も丁寧。丁寧と丁寧でバッティングを起こすはずなので、本来は使えないはずなのですが、「デス」が「でしょう」になって、推量の表現へと特化していきましたので、バッティングが起こらなくなったんですね。

これがもっと定着してくると、確認表現として使われます。

(32) a．いえ、なにしろ、人手が不足しておりますでしょう？

（安部公房「砂の女」）

b．左の前方をごらんなさい。ぼーっと、光の尾をひいた星が見えますでしょう。

（海野十三「ふしぎ国家探検」）

のように、「そうですよね」といった確認の表現です。

こういった確認の表現で独立して、現代では「でしょ（う）？でしょ（う）？」だけでも、十分確認として使えますよね。

(33) でしょ（う）？（だしょ？）

この「でしょう」がちょっと変わった形で――これは、大学院生以下の年齢だと聞いたことが無いと思いますが、「だしょう？」という言い方――お聞きになった経験がおありの方どれくらいいらっしゃいますか？　あ、結構いらっしゃいますね、ありがとうございます。私の世代だと特にそうかもしれませんが、女優で浅野温子さん、浅野ゆう子さん、「W浅野」と騒がれましたが、浅野ゆう子さんの方が特に言ってらっしゃいました。当時流行っていた八〇年代のトレンディードラマ、月9のドラマですね、あの中で、「でしょう？」というところを、彼女は「だしょ？」って言ってたんです。この、「でしょう」の「で」が「だ」に変わってしまった、それだけでも面白いんですけれども、もっと面白いのは、「今夜は雨が降るでしょう」という推量の「でしょう」は「今夜は雨が降るだしょう」という言い方にはならないんですね。つまり、彼女が「だしょ？」と使ってたのは、(31) で見た推量の「でしょう」ではなくて、あくまで (32) に紹介した確認の「でしょう」だけなんです。ですから、「でしょう」にも推量と確認の二つの用法が確立されていたのだろうと言えるわけです。このように〈丁寧な断定〉から、〈推量〉、〈確認〉という風にさまざまな用法が現代では発展・定着しています。

それでは、続いて、「書かないです」のように「ない」の否定形のあとに「デス」が使われている話に移りたいと思います。

動詞の丁寧形は基本的には「マス」が使われるはずですが、否定形の場合に限っては「デス」が使われることも増えてきました。これが起きた原因として考えられるのは、二つあるわけですけれども、一つは文法上の理由で、「書かない」と否定形になった場合は語尾が「い」で終わります。「ない」の品詞は一応否定の助動詞ということになってはいますけれども、「ない」には形容詞の「ない」もありますよね。「ここに置いてあった本がない」のような場合です。「書かない」の「ない」は、この「本がない」の「ない」と全く同じ活用、形をしています。ですから、「書かない」も「ない」で終わっているので、一種の形容詞扱いされているわけです。これは活用をみれば一目瞭然ですね。形容詞と同じ活用をいたします。たとえば

(34) a．〈動詞〉書かなくてもいい　〈形容詞〉古くてもいい

「くて」という活用になりますし、

Hosei University Repository

b.〈動詞〉書かなかった　〈形容詞〉古かった

両方とも同じ「かった」になりますし、否定形の場合、日本語教育では否定形ではなくナイ形と呼んでいますが、

c.〈動詞〉書かなくはない　〈形容詞〉古くはない

のように、「くはない」という形を取りますから、同じような文法的な扱いをされても、なんら不思議はないわけです。そこで、形容詞の後ろに「デス」が使えるのであれば、「書かない」のように動詞の否定形も同じ、形容詞のように活用しますから、「デス」が使われても問題ないであろうということで、動詞の否定形に限って「デス」を使うことが許されてきたと考えられます。

この動詞否定形＋「デス」の起源ですが、意外と早くて、少なくとも一八九〇年代から見られます。

(35) a. 全く、知らないです。(泉鏡花「海城発電」1896)

b. 秘さねばならない必要も見出さないです。(同書)

c. 別に聞いて見やうとも思はないでした。(同書)

d. このほかにいふことは知らないです。(同書)

e. 出来ないです。(同書)

f. あなた名を知らないでしょう。(泉鏡花「黒百合」1899)

g. オヤそう、お上がんなさいよ、でも未だ十時が打たないでしょう。(国木田独歩「二少女」1898)

h. ポール・レペルは多分此の家に住んで居ないでしょう。(黒岩涙香「幽霊塔」1899)

現代語的には「思わないでした」は、ちょっと不自然な感じがしますね。「思わないでもないでした」ならOKですけれども、この時代はまだ、動詞否定形の後ろに「デス」がくるという用法が確立していませんので、類推で「これがいいんだったらこれもいいだろう」というような感じでいろいろと使われていたんだと思われます。

さて、動詞否定形に「デス」がつくもう一つの理由ですが、こちらの方は語順の問題と深い関係があります。「デス」というのは、断定の助動詞「だ」の丁寧形という風に理解されています。ところが、この断定というのは、文法カテゴリーでいうと、モダリティといわれる部類なんですが、モダリティの中でも対事的モダリティと呼ばれる種類に分類され、文の中核をなす命題に直結する位置に置かれます。一方、丁寧は対人的モダリティに分類され、文の中心である命題の外側、つまり文末に置かれます。「デス」は対事的モダリティであると同時に、対人的モダリティであもるわけで、二重の役割を担っているわけですが、それぞれ文の中で実現する位置が異なるため、文法カテゴリーという視点で見た場合に、語順に不統一が起こってしまいます。そこで、この不統一を解決するために、「です」を対人的モダリティの機能へと特化させる意識が働いたのではないか、と私は考えています。

言語学に明るくない方もいらっしゃると思うので、(36) の例文でモダリティについて少し説明したいと思います。

(36) 花子はいつも勉強させられていたらしいよ。

文の中で伝えられる出来事の部分「花子はいつも勉強させられていた」が命題です。それに「らしい」と「よ」という二つの

Hosei University Repository

モダリティ表現が文末についています。モダリティの定義は、「その文を発話する話者の認識・心的態度を表すもの」です。その心的態度が向かう先によって、以下の二つに分類されます。

一つは対事的モダリティ。これは、出来事、つまり命題に対して話者がどう認識しているかを表すモダリティです。例としては、断定・推量・否定などがあります。(36) でいうならば、伝聞推量の「らしい」がそれにあたり、命題の直後に配置されます。

それに対して、対人的モダリティというものがあります。こちらは出来事ではなく、人に対しての心的態度を表す表現ですが、人というのは、この場合は話し手から見た聞き手のことです。聞き手に対する心的態度の例としては、丁寧・疑問・勧誘・確認などがありますが、(36) でいうならば、聞き手に対して話しかけていることを明示的に示す「よ」がそれにあたります。命題に直結せず、対事的モダリティの後ろに配置されます。

このように、モダリティ表現には二種類ある訳ですが、同じモダリティでも対事的モダリティと対人的モダリティではその役割は全く異なります。これが語順にも反映されていて、命題に対するモダリティ、つまり対事的モダリティが命題に直結し、その後に対人的モダリティが接続します。つまり、文の構造は次のようになるわけです。

文＝命題＋対事的モダリティ＋対人的モダリティ

さて、これを「デス」「マス」に当てはめて考えるとどうなるでしょうか。次の表現で考えてみましょう。

(37) a. 書きません。
　　b. 書かないです。

動詞否定形の丁寧形には、この二種類が存在するわけですが、aの「書きません」は、「書く」の語幹に丁寧の「マス」と否定の「ん」が接続しています。「マス」は丁寧ですから、対人的モダリティということになります。それに対して「ん」というのは出来事の成立を否定する表現ですから、対事的モダリティということになります。先ほど紹介した文の構造と違いますよね。

それに対して、(37) b. を見てください。「書かないです」というのは、動詞語幹「書か」に否定の「ない」がついて丁寧の「です」がさらに接続しています。こちらは出来事を否定する「ない」(対事的モダリティ) が先に置かれ、人を丁寧に待遇する「です」(対人的モダリティ) がその後に置かれています。ですから対事的モダリティ→対人的モダリティという語順で配列されています。つまり、こちらのほうが日本語のモダリティ構造としては自然なわけですね。だからこそ、「書かないです」の使用率が近年伸びつつあるわけです。

ただ、面白いことに、伝統的な形はどちらかというと、(37) aの「書きません」なんですね。ですから伝統的は用法は、実は日本語のモダリティの階層——語順には合っていなかったということになります。ただ、これも文法が時代とともに変わっていって、少しずつ少しずつルールが整備されていくと考えれば、もともと首尾一貫性のなかった旧来の語順が、徐々に一つ

Hosei University Repository

の構造へと収斂し、規範的な語順を確立しつつあると言えるのかもしれません。つまり、「ません」から「ないです」にシフトしているのは、「乱れ」などではなく、自然な言語変化なのだと言えるかもしれないということです。実際に使用されているのは、まだ「ません」の方が圧倒的に多いみたいですが、私は「ないです」という表現がここから一〇年一五年で爆発的に増えるのではないかと予想しています。

ちなみに、先ほど使用した（36）の文に「デス」と「マス」をそれぞれ無理やり当てはめてみるとどうなるのかを試してみました。まずは、「ます」から。

（38）a．花子はいつも勉強させられていましたらしいよ。

どう考えても「マス」はここにしか入らないんですね。ここに「マス」いれても、目上の人に対して使用するのは憚られるような表現にしかなりません。いくら「ます」を入れたとしても、それは対事的モダリティとしてしか機能していません。対人的モダリティを表す文末部分が「らしいよ」となっているので、明かにタメ口になってしまいます。

一方、「デス」であれば、文末に入れることができます。

b．花子はいつも勉強させられていたらしいですよ。

これだと、文全体が丁寧なムードに包まれますので、目上の人に対して使用しても、何ら問題のない表現になります。a．で見た「マス」の場合とは違って、こちらは「です」が対人的モダリティの位置にあるので、人に対して用いる丁寧な表現として申し分ありません。

さて、このような違いが本当に他の場合でも当てはまるでしょうか。そこで、私が勝手に予測したのが、「知りません」と「知らないです」、「食べません」と「食べないです」、「書きません」と「書かないです」の違いです。現在この二種類の否定丁寧表現が併存しているわけですから、少なからず意味の棲み分けがあるはずだ、と考えたわけです。では、どんな棲み分けがあるのでしょう。丁寧の表現が文末にきている方がやっぱり文全体が丁寧なムードになるでしょうから、そっちの方が丁寧度が高いんじゃないかな、と単純に私が予測してみました。これを確かめるために、私の授業を使って一年生にアンケートを取ってみました。「こんな会話のシチュエーションで、君だったらどう言うか」というのを自由に記述させました。

まずは、社長と就職活動の面接をしている場面です。

社長　：　君さぁ、朝食でカレー食べたりする？

あなた：　いいえ、食□。

解答欄には「食」の漢字だけ書いて、あとは空欄にしておきました。「いえ、私はちょっと……」のような回答を回避するためです。一七八名から有効回答がありまして、「食べません」が八六・五％に対して、「食べないです」はわずか七・三％しかいませんでした。私の予想としてはもう少し「ないです」が若い人の間では定着しているのではないかなと思っていたので、この結果は非常に予想外でした。その他が六・二％ですが、これはちょっとトリッキーな解答をしてきた学生がいまして……（苦笑）　そこは自由な発想でやらないと正確なアンケートになりませんから、目を瞑ることにしました。

さて、二つ目の質問は、警察署に行って、警察の人にこんな

Hosei University Repository

質問をされた場合です。

警察　：　お前、犯人が誰だか知ってるんだろ？

あなた：　いえ、知□。

この設問では、「知りません」という回答が六九・七%、「知らないです」という回答が一九・一%でした。先ほどと比べると、倍以上に「ないです」の回答が増えました。社長と話している時と警察で話している時、何が違うんでしょう。

面白いことに、「その他」のちょっとトリッキーな回答が、これについて考えるヒントを与えてくれます。「知らん」という失礼な回答が四例、「知らない」というタメ口が五例、「知るか」というこれまた失礼な言い方が二例。明らかに、大学一年生の若造が警察署に行って、警察官に対して「知るか」なんて言えるわけがないじゃないですか（笑）　よっぽど肝っ玉の据わった学生なのかなと思いましたが、単にウケ狙いなのかなとも思ったり。ですから、一〇〇パーセント信頼できる回答では勿論ありませんけれども、「知らん」「知らない」のように、かなりぞんざいな言い方が出てきているのは注目に値します。社長と話しているシチュエーションに比べると、警察の人間の方が、自分の人生を決定的に左右するわけではないので、少しぞんざいな言い方になっているんですかね。そうすると、「知らないです」がこれだけ増えたということは、「知らないです」という言い方も割とぞんざいな表現であり、「知りません」に比べると丁寧度が落ちる言い方なのかな、と考えられます。要するに、私の予想は覆された形になってですね……私……今非常に困っています（苦笑）　考えられる理由としては、「知りません」の方が伝統的＝古風な表現ですから、そちらの方が改まった場面で用いるという意識が強いんだろうな、ということです。

さて、最後にお話しするのは、この「デス」が最近ますます増えてきたというお話です。

先程、「ございます」「でございます」という表現が過度に丁寧すぎるから、「デス」が台頭してきたというお話をしましたけれども、現在でも「ございます」が自然に使われている表現が残っています。たとえば、「ありがとうございます」。これは、これ以外の言い方はなかなか難しいですね。ところが、「ありがとう」を「デス」にして、「ありがとです」もしくは「ありがとうです」という言い方も、Googleで検索してみますと、結構出てくるんです。もちろんフォーマルな場面では使わないと思います。ちょっと友達同士で使うとか、ふざけて使う程度に今は使われているんでしょうけれども、こういった表現が存在しているということは、これから、定着していく可能性も十分あるわけです。

さらに、他にも「よろしくです」とか「了です」――「了です」というのは、「お疲れ様です」の意のネット隠語です――あとは、「サンキューです」「すまんです」「スマンです」「了解です」のような表現も、検索すればそれなりにでてきます。「了解です」の方は、かなりたくさんヒットしていますけれど、よくよくこれ読んでみると、ビジネスシーンや会社で「了解です」という若者がいて不愉快だという書き込みも相当あり、それらもヒット件数の中にカウントされていました。ですから、自然

Hosei University Repository

に使われているとはまだ言い難い状況ですが、それでもやっぱり、使っている人たちが一定数存在している（そして、それに対して不快感を露わにしている人たちもいる）ということが裏付けられます。あと、「了解でした」のように過去形での用例も少なからず検索ではヒットしました。現在形だけでなく過去形も出てきたということは、少し定着の度合いが増したと考えられます。

さらに「デス」が「ッス」に拡張しています。「ッス」は、体育会系の男子を中心にたくさん使われていますが、最近では女性も使用しているようです。「趣味は音楽です」だったら、「趣味は音楽っす」。「可愛いです」だったら、「可愛いっす」のように使われるわけですが、たとえば（45）のように、「こんにちわです」という言い方がないのに、「こんにちわ～っす！」という言い方はあるんですよね。「デス」が「ッス」に変化したとすれば、「こんにちわです」という表現がなければ、「こんにちわっす」もしくは、「ちわ～っす」という表現も存在し得ないはずなのに、こちらだけが存在しているということは、「ッス」が独り歩きし始めている証拠だと考えられます。

他にも、動詞に「ッス」がつけられる用例があります。たとえば（46）のように「食べるです」は言えませんが、「食べるっす」だったら言えるんです。「わかったです」は言えなくても、「わかったっす」だったら言えなくもない。もちろん許容できないという方もいると思いますが、一定数使っている若者がいるというのも事実です。「デス」が使えないのに「ッス」が使えるという用法が出て来ておりますので、「デス」のみならず「ッス」も拡大していくものと思われます。

最後のまとめに移ります。今日のお話は、最初うっかり「ますます丁寧化する日本語」というタイトルにしてしまったんですが、「了解です」とか「あ、わかったっす」のような言い方は本当に丁寧でしょうか。……。そうですよね。私も、先週このハンドアウトを書いてる時に「しまった！」と思ったんです。丁寧表現のバリエーションとしては広がっていますけれども、じゃあ、こういった表現が本当に丁寧な表現と言えるかというと、実は、それほど丁寧な表現ではなくて、堅苦しい丁寧な表現を少しカジュアルにした、若者風の丁寧表現と言わざるを得ないと思います。ですが、この点は先ほど形容詞のところでも申し上げましたが、「美味しゅうございます」が、ちょっと形式張り過ぎているので「美味しいです」というカジュアルな丁寧表現が生まれてきたように、「ッス」という表現も、今の世代の若者にとっては、普通の敬語があまりにも形式張っている、敬意が強すぎる、親しい先輩・後輩の間柄だけにしか使えなくてもいいからもっと距離が短くなるようなカジュアルな丁寧表現はないか、ということで作り出されたものではないかと思います。そういう点では、丁寧表現のバリエーションは増えていくけれども、必ずしも「もっと丁寧」な方へのみ向かっていくわけではない、と結論づけてまとめに代えたいと思います。

多少長くなりましたが、ご静聴ありがとうございました。

参照文献

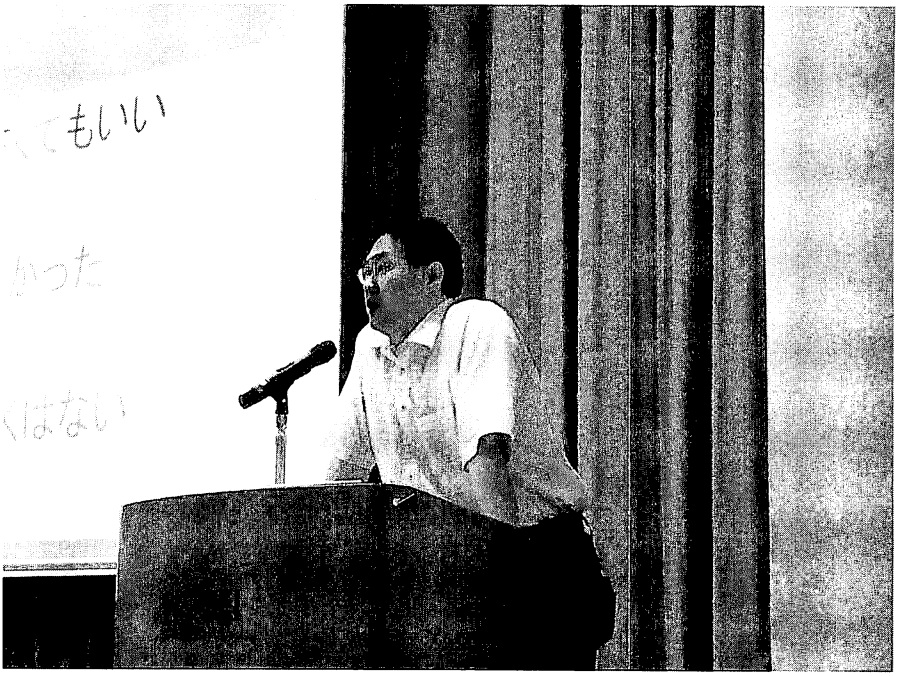
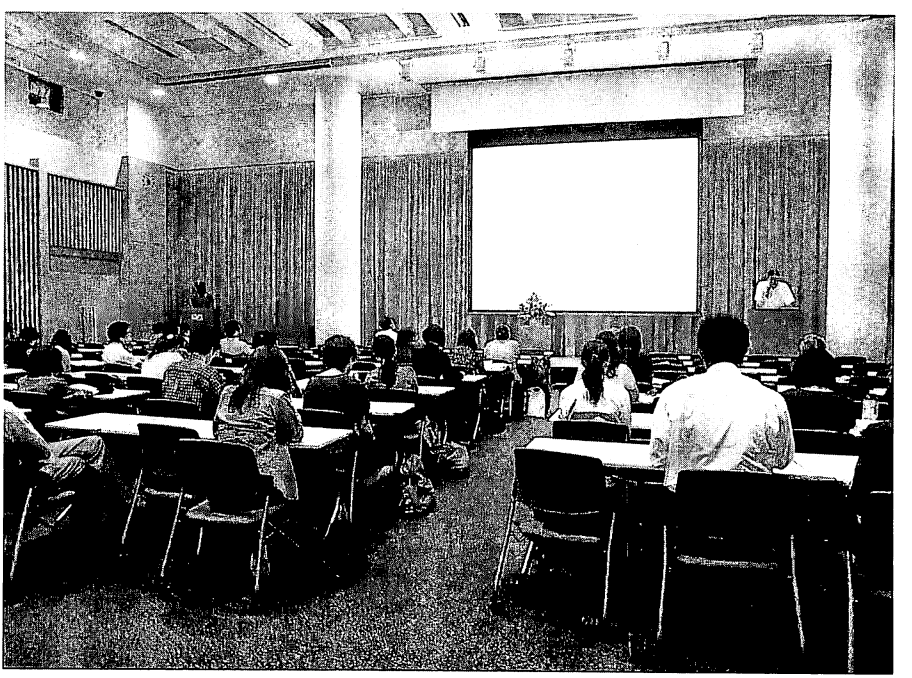
井上史雄　一九九五　「丁寧表現の現在―デス・マスの行方」『国文

Hosei University Repository

学解釈と教材の研究』四〇（一四）
前田　勇　一九六〇　「京阪の『です』標準語移入説」『国語国文』二九（四）
日本語記述文法研究会　二〇〇三　『現代日本語文法4』くろしお出版
仁田義雄・益岡隆志　一九八九　『日本語のモダリティ』くろしお出版
野口恵子　二〇〇九　『バカ丁寧化する日本語　敬語コミュニケーションの行方』光文社
尾谷昌則・二枝美津子　二〇一一　『構文ネットワークと文法』研究社
上田万年・松井簡治　一九一五　『大日本国語辞典』冨山房
辻村敏樹　一九五九　「近世後期の待遇表現」『国語と国文学』十月号
辻村敏樹　一九六四　「面白かったです・面白いでした」『口語文法講座3　揺れている文法』明治書院
辻村敏樹　一九六五　「「です」の用法　―近世語から現代語へ―」『近代語研究　第一集』武蔵野書院
辻村敏樹　一九六八　『敬語の史的研究』東京堂出版
山田孝雄　一九二二　『日本口語法講義』宝文館
山口明穂・秋本守英　二〇〇一　『日本語文法大辞典』明治書院
湯沢幸吉郎　一九四四　『現代語法の諸問題』日本語教育振興会
湯沢幸吉郎　一九五四　『江戸言葉の研究』明治書院

（おだに　まさのり・本学准教授）

Hosei University Repository



2012年７月14日　国文学会大会にて